

65

トマス・バルトリンの 『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』

安西なつめ

日本大学

ヨーロッパでは16世紀から17世紀に解剖学が復興し、人体の構造と機能に関して多くの発見があった。この潮流はパドヴァのアンドレアス・ヴェサリウス(Andreas Vesalius, 1514-1564)に始まり、ボローニャ、バーゼル、パリ、ロンドン、ライデンなど各地に波及した。17世紀後半には各地で学会の設立や雑誌の創刊が相次ぎ、医学のみならず自然学の様々な発見と成果が雑誌を通して報告された。たとえば、フランスの『ジュルナル・ド・サヴァン』(1665-)や、イギリスの『フィロソフィカル・トランザクション』(1665-)といった学会誌や、イタリアの『サッジ』(1666)のような実験論文集などである。

ライデン以北では、デンマークのコペンハーゲンで同様の傾向が見られた。当地は北ヨーロッパの諸都市の中で南に位置し、1479年に創設されたコペンハーゲン大学は、当時トマス・バルトリン(Thomas Bartholin, 1616-1680)やニコラウス・ステノ(Nicolaus Steno, 1638-1686)といった著名な解剖学者を輩出していた。当時のコペンハーゲン大学の解剖学教授であったトマス・バルトリンによって刊行されたのが『コペンハーゲンの医学・哲学紀要 Acta medica et philosophica Hafniensia』(1673-1680)である。本研究ではこの『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』を資料に、雑誌の構成や収録された論考、論考の執筆者などを整理、分析した。

『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』は1673年から1680年にかけて全5巻刊行されたが、バルトリンの死後は刊行が継続されなかった。各巻は2部からなり、主として雑誌を構成しているのが論考を収録した第1部である。続く第2部は付記のような形で、コペンハーゲンで発表された報告などの内容がごく簡潔に、発表者、日付とともに記されている。

第1巻第1部には、1671年と1672年までの149題の論考が収録されており、1673年に刊行された。第2巻第1部は1673年までの134題の論考が収録されており、1675年に刊行された。第3巻と第4巻は合わせて刊行され、1674年-1676年までの論考が、第3巻に95題、第4巻第1部に83題収録されて、1677年に刊行された。第5巻は1677年-1679年までの134題の論考が収録されており、1680年に刊行された。

雑誌の内容は様々な自然学関係の報告であり、ワシやライオンといった動物の解剖、病気や治療の記録、奇形の報告、植物の紹介、天文に関する資料など多様である。掲載された論文の執筆者には、トマス・バルトリンのほか、コペンハーゲン大学を卒業後各地で研究し、1672-1674年まで勅任解剖学者としてコペンハーゲンに戻っていたニコラウス・ステノ、ステノの指導者でもあったコペンハーゲン大学教授のオーレ・ボルク(Ole Borch, 1626-1690)、キール大学教授のヨハン・ルートヴィヒ・ハンネマン(Johann Ludwig Hannemann, 1640-1724)、コペンハーゲン大学の解剖学、植物学教授シモン・パウリ(Simon Pauli, 1608-1680)などがいた。

『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』は、17世紀後半における北ヨーロッパの動向を知ることができる重要な資料である。本研究において整理された雑誌の構成や論考の内容などを踏まえ、さらに雑誌の性質やヨーロッパ諸国との相互の影響について分析していくことが必要だと考えられる。

付記：本研究は2017年度科学研究費補助金「初期近代における北ヨーロッパの医学の発展に関する研究」(課題番号17K12958, 研究代表者安西なつめ)による成果の一部である。